

January 2012

京都大学総合博物館 ニュースレター



特別展 INCLUSIVE DESIGN NOW2011 の様子

総合博物館開館10周年にあたって (大野照文)	2
収蔵品紹介 産雌性単為生殖種ナナフシモドキの雄標本 (角谷岳彦)	4
古代エジプト・コプト織物のワークショップ報告 (東村純子)	5
INCLUSIVE DESIGN NOW 2011開催報告 (塩瀬隆之)	6
総合博物館日誌 平成23年4月～平成23年12月	8

総合博物館開館10周年にあたって

京都大学総合博物館は2001年6月に開館し、今年で10周年の節目を迎えることができた。この間、学内外よりの多大なご支援に対し、館の教職員一同感謝いたします。

1897年創立の京都大学では、学部、研究科や研究所などで、国宝・重要文化財やそれに準ずる文化財、あるいはタイプ標本をはじめ、文化史・自然史・技術史の各分野にわたる重要かつ豊かな資料群が収集されてきた。文系資料については、すでに1914年創設の陳列館にルーツをもつ文学部博物館において手厚く維持管理がされてきた。1980年代には、他の分野の資料についてもその維持管理が課題となってきた。文・理・工のそれぞれに特化した複数の博物館の設立などのアイデアも初期には検討されたが、文学部が、文学部博物館を合流させるとの大英断をしていただいたことで、最終的には総合博物館の構想にまとめられ、1997年には組織としての総合博物館が設置された。これによって京都大学が収集し、今日も収集し続けている貴重な資料群を適切に一括管理、研究・教育に利活用し、その成果を一般に公開する、機能的な博物館の礎が置かれた。

組織の発足後、博物館の教職員は、河野昭一初代館長(現京都大学名誉教授)を中心に、新棟建物の設計、地下収蔵庫内の可動式標本棚の設計制作管理、200万点に及ぶ理系の学術標本資料の輸送作戦を敢行しつつ、その一方で自然史常設展示の制作をも進めた。

自然史展示の制作は単年度制の予算の都合上、入札から竣工までわずか半年の猶予しかなかった。請け負った電通、設計担当の丹青社、展示制作にあたった日展、電通テック、創造社、また、熱帯雨林ジオラマ制作のためのボルネオ島現地調査の際に支援して下さった越井木材などの皆さんの献身的協力、さらには本学の多くの事務職員、技術職員の協力で何とか完成にこぎつけた。

開館以来の博物館における様々な実践の最大の成果は、博物館という機関の存在意義の重要性と可能性を学内外の研究者や市民とともに再確認できたことにある。当館に限らず、博物館の最重要ミッションは、学術標本資料に意味や価値を与え、大切に守り伝えることにある。資料がなぜ貴重かという意味づけ、価値判断は、研究者を擁する大学博物館が得意とするところである。しかし、なぜ研究した資料

を守り伝える必然性があるのか？これは、博物館の存在の根幹に関わる問いである。新種の記載の証拠のタイプ標本は保存し続けねばならないという類の自明のことも含め、総合博物館は、組織発足以来約15年、そして開館以来10年の試行錯誤を通じて、この根元的問いに対する答えを多様な形で提示し始めている。

平成22年春季企画展「科学技術Xの謎」では、準備段階で数十年前から当館に保存の資料を学内外の研究者の協力を得て最新の装置でX線撮影を行った。その結果、エジプト考古学資料中の鳥のミイラの正体の特定(アフリカクロトキ)や弥生時代の炭化米火災起源説の否定等の多くの新発見があった。守り伝えた博物館の資料が、新たな手法や発想と出会うことで発見を生み出すのである。また、「クニマス」の再発見が明るいニュースとして国民的ブームを巻き起こしたことは記憶に新しいが、この再発見も、当館が守り伝えた田沢湖産のクニマスの液浸標本なしにはあり得なかった。

資料は放置すれば劣化する。博物館の前庭では、天気の良い日に版木の保守作業を行っている光景が見られる。文学研究科の大学院生らが、カビの生えそうな箇所を丁寧にアルコールでふき取ってくれているのだ。このような作業に始まり、重文や国宝級の資料の修復まで、当館では日常的に保守活動を行っている。



資料は、このように大切に扱ってやれば、新たな物語を語ってくれる。保守や修復のための緻密な調査・再検討がしばしば新発見につながるのである。当館では、所蔵の「マリア十五玄義図」が重要文化財の指定をうけたことを機に2004年に修復を行った。その結果、掛軸の表具に修復された跡が見つかった。その方法は表具師の手によると考えるには余りに稚拙で、禁教となり弾圧が強化される中、表装の知識を持たない信者が見よう見まねで、修繕したものと考えられる。修理を必要とするほど傷むというこ

とは、この絵が使われ続けたということ。信者はこの絵にひっそりと祈りを捧げ続けていたのだ。修復記念の展示では、この新たなエピソードもお伝えすることができた。奇しくも日本に初めてキリスト教を布教したザビエルの生誕5百年に当たる2006年のことであった。

大切に保全され、整理された当館の学術標本資料は、当館や京都大学だけでなく、広く世界中の研究者に利用されている。例えば、当館の130万点を超えるサク葉標本資料コレクションは、*Harbarium Kyotoensis*として国際的に有名で、植物学関連の国際誌には、*KYO*という略号に始まる登録番号のある当館の標本が頻繁に図示されており、その実物を一目みたいという世界中の研究者の閲覧、貸出要請が頻繁に寄せられる。そして、2009年度だけでも、国内119件、国外63件の閲覧があり、学内よりの閲覧12件を加えると194件の閲覧があり、また貸出も国内外計10点584点の貸出実績があり、これを担当教員1名で対応しているのが現状である。

さて、このようにして蓄積した学術標本資料の収集・保全・利活用のノウハウを生かした国際研究プロジェクトが当館主導で始動し始めている。当館を拠点機関とする「東アジア脊椎動物種多様性研究基盤と標本ネットワーク形成」がそれで、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業に採択され、2011年4月1日より三年間のプロジェクトとして開始された。豊かな熱帯雨林なども擁する東南アジア地域の陸上脊椎動物の多様性の研究は、生物学の研究の国際的フロンティアの一つである。この分野に実績のある京大の研究者とともに、また当館所蔵の関連標本群をコアに、研究とそれに不可欠な標本資料の相互利用のネットワーク化を計り、この分野の研究を国際的に振興しようというものである。

学術標本ネットワークの形成がきわめて重要であることは、世界最先端技術を誇る日本の製造業が、材料たるレアメタルの獲得で見せた脆弱性を思い浮かべれば理解できよう。生物標本の国外持ち出しに様々な制約がかけられつつあることも周知の事実である。大学間の国際競争が激化すれば「学術標本資料を制するものが研究を制する」ことになり、学術標本資料の囲い込みすら危惧される状況である。当館が主導して東アジア地域に於ける標本の相互利用の仕組みをつくることは、学術標本資料に基づく様々な学問分野の健全な発展に国際的な貢献をすることにもつながる。

大学における研究・教育活動にあたっては、その成果は論文や著作として図書館で、また研究に使われた標本資料は博物館で末永く保管する仕組みが曲がりなりにもできあがっている。研究・教育活動に際しては、他にも写真・映像・録音、フィールドノート、研究会の記録、講義ノート、論文原稿などが生まれる。京都大学は、これらの資料が、後に新たな研究の材料として、あるいは優れた研究の生まれた過程の検証の証拠として高い価値を有することを他に先駆けて看破し、最近「京都大学研究資源アーカイブ」機能を立ち上げた。総合博物館は、このアーカイブの主担部局として選ばれ、配属された教員1名が館の教職員と協力し、調査やデジタルアーカイブシステムへの登録などの任務を遂行している。また研究資源をもとに京都大学の教育研究活動を紹介する映像等を作成、川端通りに面した京都大学稲盛財団記念館1階の映像ステーションで公開している。

学術標本資料を大切に守り伝えること、そこから新たな学術情報を引き出し続けるためには、優れた後継者の育成が必須である。当館では、このような観点から小・中・高校生を対象として、組織発足当時から全学の教職員の協力も得ながら博物館での学びや研究を伝える活動を行ってきた。総合大学に置かれた博物館の強みを生かし、あらゆる分野の研究の面白さを子どもたちに伝えている点に特色がある。

展示場の中の、講演者の息吹を直接感じられるくらい小さな円形劇場「ミュージ・ラボ」では、毎月1回レクチャー・シリーズが開催され、研究者が至近距離から子どもたちに親しく自分の研究について語りかけている。8月に5日連続で開催し、文系から理系までにまたがる15ほどの体験学習プログラムを提供している夏休み学習教室「体験EXPO」は今年で11年目を迎えた。毎週土曜日の朝、大学院生や学生たちが、化石、押し葉、古地図、土器片などのモノを当館のロビーに持ち込み待機する。これが週末子ども博物館である。子どもたちの個性や興味を重視して、オーダーメイドで学びを触発するので人気があり、毎週末に開催し続け、すでに8年目に突入した。サイエンス・コミュニケーション力を鍛錬する場としても注目されはじめている。



以上のような取り組みが徐々に認知され、子どもたちの学びの動機付けについて各方面から協力要請が相次ぐようになった。そこで、平成22年には当館がお世話をして、西村和雄名誉教授(当時経済研究所所長)を委員長に京都大学と京都府教育委員会との連携事業検討委員会が発足した。府下の子どもたちに、自校であるいは京大で、研究や学びの楽しさを体験してもらうことが目的である。既に平成22年度だけで、95校の9823名の児童・生徒に京大の研究に接してもらうことができた。これは、京都府下の全児童生徒数の7.3%にあたる。多くの協力者を得て、数年の内に京都府の子ども全員が一度は京大の研究に触れたという状況を作り出しうるところまで来た。

開館以来の総合博物館の歩みを、博物館をもっとも特徴づける学術標本資料という観点からまとめさせていただいた。これまでの10年の経験から、博

物館とは、自分たちのルーツや未来について、標本というモノを通して探る場であると悟った。モノは時とともにこわれ、情報は失われてゆく。それに抗うことを宿命づけられた博物館という営みは、いわば、熱力学第二法則に逆らう営みである。地球上に生命が出現以来35億年、物理法則に逆らう生き物は未だかつて生まれなかった。記憶(モノと知的遺産)を次世代につなぐ博物館の仕事は、熱力学第2法則にさからう企てであり、人類の知性をもってしか挑戦しえない至高の企てである。この意味で、博物館をもち、学術標本資料を維持し続けることは大学の知性の証明であると結論し、その知性が更に拡がり深まることを念じて館の教職員一同さらに未来に向かって努力を積み重ねるべく覚悟を新たにしている。今後とも皆さんの温かいご支援を御願ひしたい。

(京都大学総合博物館 館長 大野照文)

収蔵品紹介

産雌性単為生殖種ナナフシモドキの雄標本

このたび、当館に、彦根市立城陽小学校の6年生、林裕奈が累代飼育によって得たナナフシモドキの雄個体の標本が収蔵されることになった。

普通昆虫は、雄と雌が交尾して受精卵を産むことで雌雄の子供を残すが、一部の昆虫では雌が未交尾のまま産卵した未受精卵がそのまま発生して次世代の雌になることがある。これを産雌性単為生殖、または、処女生殖とよぶ。ナナフシモドキも産雌性単為生殖をすることで有名な種で私が大学生だった1980年代には雄がいないとされていた。1996年に新潟県の胎内昆虫の家の元館長大橋賢由氏が北蒲原郡黒川村で採集した成虫が産卵した卵から飼育した中で雄成虫が発見されて以降、野外で本種の雄とされる個体が若干採集されており、2009年7月には愛媛県の面河山岳博物館学芸員の矢野真志が国内7件目の野外個体を採集したと報告している。

コノハムシの仲間では処女生殖では雌だけが生まれ、有性生殖すると雄と雌が生まれることが知られている。また、アブラムシの仲間には夏には処女生殖で雌のみが生まれるが秋になると未授精のまま雄と雌の両方が生まれて有性生殖を行う種があることが知られている。しかしながら、ナナフシモドキの雄がどのように生まれるのについては、まだ

よくわかっていない。

2011年6月25日、ピンクの封筒に「京都大学総合博物館様」と表書きされた封書が私の手元に届いたが、その中には「今年、ナナフシモドキのオスを育てることに成功しました」という俄かには信じがたい内容がいかにも小学生らしいつたない文字で綴られていた。とりあえずは、誤同定の可能性を疑い雄が普通に見られる近縁種の情報を知らせる手紙を送ったところ「平成20年の4月26日に滋賀県宇曾川ぞいの桜の木で4匹のナナフシモドキの幼虫を捕まえそのうち1匹が羽化に成功しました。その1匹のメスが産んだ卵を21年に孵化させ、このオスは、そのナナフシモドキの4代目にあたります。今まで739個の卵



写真1 ナナフシモドキの交尾
(2011年7月8日、林嵩人撮影)

から424匹を孵化させ117匹を羽化させました」との手紙が、同定のキーとなる卵やメス成虫の写真とともに送られてきた。

小学生が同じメス個体由来の100匹以上の羽化に成功させるのもすごい話だが、その中から本種としては、極めて珍

しい雄個体が出てきたのは驚きである。なにより、確実に未受精卵から生まれた本種の雄個体が確認できたことは生態学的に興味深い。しかも、この手紙を受け取った時点では、この雄個体は元気に生きた状態で飼育されていて、同年7月8日には交尾行動が確認され、その撮影に林裕奈の兄、嵩人が成功した(写真1)。

本件を滋賀県立大学の西田隆義教授に相談したところ、すぐさま飼育現場に確認に向かわれ、7月13日には、生きたままのナナフシモドキの雌雄成虫を西田研究室に受け入れることができた。このナナフシモドキの雄個体は、同じ雌由来の雌1個体とともに西田教授が手ずから標本にされ、12月16日当館に

届けられた(写真2)。現在、西田研究室では、この雄個体と交尾した雌が産んだ卵が孵化を待っている。ここから孵化した個体の性比や遺伝的組成しだいで、本種における雄の意義があきらなる事が期待できる。

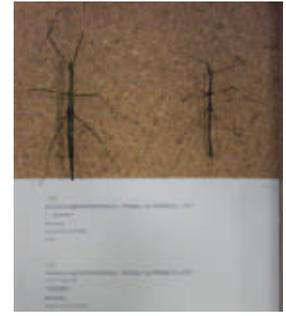


写真2 博物館に寄贈されたナナフシモドキの標本(右が雄)

(京都大学総合博物館 助教 角谷岳彦)

古代エジプト・コプト織物のワークショップ報告

場 所：京都大学総合博物館 本館 講演室
開 催 日：2011年11月5日(土) 13:30～16:30

開館10周年記念企画展「埃及考古」に際して、古代エジプト・コプト織物のワークショップを行いました。参加者は21名。織物に興味をもつ女性が多く、夫婦や家族連れ、中国人留学生など多彩な顔ぶれとなりました。

はじめに、コプト織物の亜麻・羊毛素材と織りの技法についてスライドをみながら学習した後、織りの実践に入りました。

機の道具は、竹ベラや空き箱(今回はいちごパック用の箱)など、身近にあるものを利用しながらも、コプト織物に特有の技法を体感するのが目的です(写真1)。

織りの初心者は、亜麻糸を経に、毛糸を緯に用いて綴れ面を自由に織り出します。希望者は上級コースに挑み、亜麻の平織りから続けて毛糸で文様を織り出す、本格的な織りに挑戦しました(写真2)。

羊毛や亜麻の糸はどのような方法で作られたのか。講師の田村直子さんに、紡錘車を使った糸紡ぎを実演いただきました。その巧みな技に会場が沸き立ち、参加者も糸紡ぎにしばし熱中しました(写真3)。

そして、織り技法の応用編。講師の星野利枝さんには、コプト織物の「斜め浮織り」の実演を、グアテマラの綴れ織りの技法も交えながら解説いただきました(写真4)。

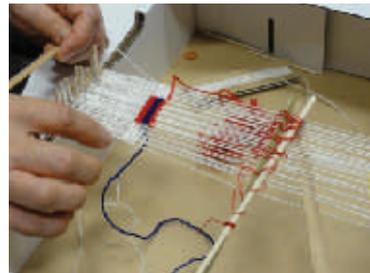
残り時間もあと少し、参加者の方々は真剣な眼差しで、手紡ぎした糸も織り込む等工夫を凝らします。空き箱を利用した機は、製作途中のままお持ち帰り。皆さん、とても満足された様子で、熱気あふれるワークショップとなりました。

(日本学術振興会 特別研究員 東村純子)

(1)



(2)



(3)



(4)



INCLUSIVE DESIGN NOW 2011開催報告

1. はじめに

2011年11月16日から12月4日まで開催された特別展INCLUSIVE DESIGN NOW2011について報告する。インクルードとは「包摂する」、あるいは「巻き込む」という意味で、多様な個性や能力をもつユーザーの参加によって社会の革新(イノベーション)をめざすデザイン手法である。専門家だけではなく、多様な人が製品やサービスの開発プロセスに参加することで、デザインはより幅広く、魅力的で、私たちの暮らしに変化をもたらすことが期待される。本展示では、京都大学のほかに英国王立芸術学院、金沢美術工芸大学、九州大学、尊厳のためのデザインリサーチプロジェクト、オムロンヘルスケア株式会社、コクヨファニチャー株式会社、studio-Lなど14のプロジェクト、35の製品やサービス提案などが展示された。



写真1 インクルーシブデザインナウ2011会場
デザイン展ということもあってこれまで大学博物館に足を運んでいなかった新たな来館者層を開拓できたか。

製品やサービスの開発者の多くは、ユーザーの声から率直なニーズをつかみたいと考えているが、必ずしも成功してはいない。ユーザー参加型デザインの可能性には期待しつつも、導入に二の足を踏む理由は、ユーザー自身がニーズを明確に説明できないことへの失望や、特定のユーザーに偏ったニーズを鵜呑みにしてしまうことで、かえって多くの人の期待から逸れてしまうことを懸念するからである。インクルーシブデザインとは、高齢者や障害のある人など、これまでデザインのメインターゲットから排除(Exclude)されてきた特別なニーズを抱えたユーザーを、デザインプロセス初期の概念デザインから積極的に巻き込んでいくデザイン手法である。

インクルーシブデザインの世界的研究センターを抱えるイギリスの英国王立芸術学院(Royal College of Art)では、市民団体や特定非営利活動法人(NPO)らと積極的に協創的關係を築いている。そして、使いにくい、わかりにくいといった改善を施すスモール・ユーザービリティ[5]にとどまらず、特別なニーズを

抱えたユーザーが引け目を感じることをしないよう、市場のメインストリームを占めることができるデザインにむかう相互学習過程として期待されている。

2. ユニバーサルからインクルーシブへ

どんな人にとってもやさしく、使いやすい製品が存在するに越したことはないが、すべからず全員に平等であることを焦りすぎると、単に機能を補填することにしか目が向かなくなってしまう。たとえば写真2左に示す金沢美術工芸大学・荒井利春研究室が開発した「箸が苦手な人のスプーンとフォーク」は、その違いを鮮明に表している。高齢者の食事場面を入念に観察した結果、単にスプーンを握るための自助具ではなく、脇を閉じて美しい所作で食べるのできるスプーンの開発を目指したものである。写真2右に示す九州大学・平井康之研究室が提案することも×くすり×デザインのプロジェクトでは、「こんなくすりがあったらいいな」の実現を目指し、絵本の中の雨粒を取り出して服薬できる仕掛けを提案している。いずれもデザイナーの目の前にいるユーザーとの直接の対話を大事にされた成果である。

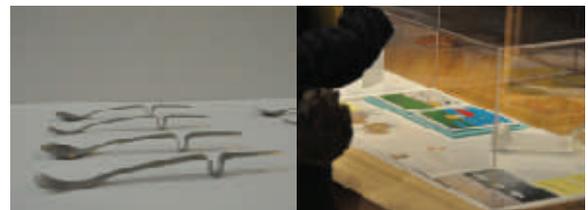


写真2 箸が苦手な人のスプーンとフォーク (左: 荒井研究室) + こんなくすり×デザイン (右: 平井研究室)

インクルーシブデザインの主張はより明解に、ただ一人の個人、「〇〇さんの生活」にむきあうところからデザインをはじめ。障害のある人や高齢者の「ために」という思いが強すぎてしまうと、どこかで自分と相手との間に線引きをしてしまい、知らず知らずのうちに我慢や苦勞を強いてしまう。「障害のある人」の定義が、Disable personからDisabled personへと規定しなおす姿勢は、不十分なデザインによってDisabled(できなくさせられた)人と解釈することである。そこで何ができない、という状況を個々人の課題としてすませるのではなく、デザインの課題として引き受けることが特徴である。徹底した個人への回帰からアイデアを練り上げ、その中に複数の異なるユーザーを想定したマルチプルシナリオを描いていくと

いう手順で、自分も欲しくなるような魅力的なデザインによって対象ユーザーを広げていく。

3. 小さな声をいかに拾うか

駅や公園のような公共空間をデザイン対象とすると、すべてのユーザーを想定した設計解を拙速に求めてしまう。一方で実際のユーザーの声に耳を傾けようとしても、ユーザー自身が公共空間をデザインする上で素人であることは否めず、期待するような理路整然とした改善提案は得られない。しかし、だからといってその言葉を軽んじることはできない。当然のことながら、その素人こそが実際に公共空間を利用する大部分のユーザーであり、デザイナーやエンジニアは自らもつ専門的な語彙とユーザーの認知との間に生まれるギャップに敏感でなければならない。ニーズを表現する「言葉」は、ユーザーがあらかじめもっているものでもなければ、デザイナーやエンジニアの専門用語でもない。デザインプロセスを共有する中で、共に創り出した言葉であることが重要である。写真3に示す社会福祉法人の建築模型は、そういった小さな声を拾う秀逸なデザインの好例である。ラフにつくられた建築模型に黒板塗装が塗付されており、チョークで自由な意見が書き込めるようになっている。狭い建物の脇での一瞬の憩いや2mを超える崖を滑り降りてまで人目をはばかった休憩など、建築家やデザイナーにインタビューされたり、アンケートではわざわざ回答したりしないような何気ない休憩の一こまが色とりどりのチョークで記されていた。



写真3 建築家:家成俊勝氏が施設スタッフの何気ない休憩の一こまを可視化できるようにしたラフ建築模型

4. 「お手を触れないでください」をデザインする

インクルーシブデザインの特徴は、調査分析や基本デザインといったデザインプロセスの早い段階からリードユーザーが積極的に参加できる形態をとることである。視覚障害や聴覚障害、片麻痺などさまざまな障害のある人や車イスユーザー、高齢者をリードユーザーとして迎え、それ以外にデザイナーやエンジニア、研究者、学生ら多様な分野の参加者で6~8人のチームを構成する。できるだけ多様な専門性を備えた参加者を集めることがワークショップ全体の創造性に直結する。本展示会場も実際にデザインワークショップを実施し、資料台の高さを変更するなど、すぐに改善に活かした。



写真4 展示会場もワークショップでデザイン

目の見えない来館者に対しては、展示品の種類によっては触れることを認めている美術館、博物館も少なくない。出品者によっては手にとって来館者に見てもらうこともやぶさかでない者も決して少なくはないが、残念ながら過去に展示品をぞんざいに扱われた苦い経験のある出品者にとってはどうしても後ろ向きになってしまう。そこで展示品に触れられない理由を明示することで、もしかすると心理的負担が軽減するかもしれないとワークショップの中でアイデアが出た。そこで早速、「世界に一つしかないので、お手を触れないでください」、「鋭利な部分があるので、お手を触れないでください」といった触れられない理由の可視化を行った。



写真5 展示品に触れられない理由を追加してみる

5. <デザイナーとユーザー>≠<展示者と来館者>

ユーザーをデザインパートナーとして迎えるといっても、もちろんデザイナーの代わりが務まるわけではない。しかし、<助ける人—助けられる人>という一方的な支援関係のままでは、デザイナーの先入観を越えるようなデザインの革新は生まれない。ユーザーの位置づけが変わらなければ、ユーザーから導かれる言葉もまたデザイナーの価値観を揺さぶるほどの力をもつことはない。リードユーザーといっても、決してデザインの専門家である必要はなく、ユーザーの生活実態や行動過程を率直に提示することで、デザイナーやエンジニアの気づきをリードしていくことが期待される。おそらくは展示についても同じことが言えて、研究者や学芸員が知り得たことと、来館者が知りたいこととのあいだにはまだ溝があって、それを絶え間なく埋める努力が必要なのである。

最後に、本特別展示は、各プロジェクトスタッフ以外にも、京都工芸繊維大学、大阪市立大学、京都造形芸術大学などの多数の大学生、大学院生の尽力によって開催することができた。ここに深謝したい。

(京都大学総合博物館 准教授 塩瀬隆之)

京都大学総合博物館日誌（平成23年4月～平成23年12月）

総合博物館セミナー

実施日	内容・テーマ	講演者
4月8日(金) 第25回	メバル属魚類の分類と系統	武藤望生(農学研究科博士後期課程)
5月13日(金) 第26回	哺乳類頭部の胎子期におけるヘテロクロニーと形態多様性進化	子藪大輔(総合博物館・日本学術振興会特別研究員)
6月10日(金) 第27回	ウミシヨウブの生活史	中川昌人(総合博物館・研修員)
7月8日(金) 第28回	安定同位体分析による縄文時代人の食性と集団間移動の解明	日下宗一郎(理学研究科・日本学術振興会特別研究員)
7月29日(金) 第29回	The contributions of palaeontology to the study of biological development in vertebrate animals	Marcelo Sánchez (Assistant Professor, Universitaet Zuerich, Switzerland)
9月2日(金) 第30回	Quaternary Mammalian Fossils of Taiwan	張 鈞翔(客員准教授・台湾国立自然科学博物館助理研究員)
9月14日(水) 第31回	Out of Africa and what happened next: a population genetic approach to human phenotypic variation	Lia Betti (PhD candidate School of Anthropology and Conservation, University of Kent, UK)
10月14日(金) 第32回	アカネズミの形態における成長の季節変異と地理的変異	新宅勇太(理学研究科博士後期課程)
11月11日(金) 第33回	Taxonomic status of small mammals of China and what we should do for a practical scheme	李 玉春(客員教授・山東大学威海分校海洋学院教授)
12月2日(金) 第34回	遺跡出土木製品からみた木材利用史—広葉樹から針葉樹へ—	村上由美子(総合博物館・研究員)

レクチャーシリーズ

実施日	内容・テーマ	講演者
4月9日(土) no.89(ジュニアレクチャー)	元素の同位体が語る、生き物の暮らしと環境	陀安一郎(生態学研究センター・准教授)
5月21日(土) no.90(ジュニアレクチャー)	ユリ科植物の系統分類学	田村 実(理学研究科・教授)
6月11日(土) no.91(ジュニアレクチャー)	植民地と環境保護—100年前の朝鮮半島の森林植生図—	米家泰作(文学研究科・准教授)
7月9日(土) no.92(ジュニアレクチャー)	X線で見える岩石の中の貴金属	小木曾哲(人間・環境学研究所・准教授)
9月10日(土) no.93(ジュニアレクチャー)	鯨のお用い	上野大輔(人文科学研究科・日本学術振興会特別研究員)
10月15日(土) no.94(ジュニアレクチャー)	サルの声とヒトの話しことば	西村 剛(霊長類研究所・准教授)
11月12日(土) no.95(ジュニアレクチャー)	地球の重力を測る	福田洋一(理学研究科・教授)
12月3日(土) no.96(ジュニアレクチャー)	イルカやクジラのおい認識	岸田拓士(理学研究科・グローバルCOE研究員)

展示

実施日	内容・テーマ
3月16日(水) - 5月8日(日)	特別展 京都大学研究資源 アーカイブ公開記念 石舞台古墳 発掘の記録
7月13日(水) - 9月11日(日)	特別展 花の研究史—京都大学の植物標本—
10月19日(水) - 12月18日(日)	開館10周年記念企画展 埃及考古—ペトリーと濱田が 京大エジプト資料に託した夢—
11月16日(水) - 12月4日(日)	特別展 インクルーシブデザインナウ2011
12月7日(水) - 2月5日(日)	特別展 建築家ジョルジョ・ヴァザーリ誕生500周年記念 ジョルジョ・ヴァザーリのウフィツィ: 建築とその表現



埃及考古

第27回公開講座「埃及考古」

実施日	内容・テーマ	講演者
11月19日(土)	イギリスのアーカイヴから見た京大エジプト資料の特徴とは?	中野智章(中部大学国際関係学部・准教授)
11月26日(土)	文明をむすぶ—京大所蔵エジプト資料がつなぐヒトとモノ—	泉 拓良(文学研究科・教授)
12月3日(土)	古代エジプト・コプト織物の手仕事の技	東村純子(日本学術振興会特別研究員)
12月10日(土)	よみがえる古代エジプト人: アビドス人骨かく語りき	片山一道(京都大学名誉教授)

発行日 2012年2月1日発行

編集・発行 京都大学総合博物館 電話 075-753-3272, 3274
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 FAX 075-753-3277<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>